

葉山町立長柄小学校

研究テーマ：考えて行動できる人(子)を育てる系統的な学び～探究課題の発見と解決を通して～

1 実践の目的

研究テーマ「考えて行動できる人(子)を育てる系統的な学び」は、令和7年度の小中一貫校開設に向けて、中学校と共に取り組んでいる9年間の系統的なカリキュラム構築を目指したものである。

小学校と中学校を貫く取組の柱として「探究的・対話的な学び」を軸に、児童の資質・能力を育成することを目指し、「児童の興味関心に基づく探究課題の発見と解決を通して」を副題として、校内研究を進めた。

2 実践の内容

教育目標(9年間で育てたい子ども像)を同一にしたものの、小学校と中学校の教職員が本当の意味で共通理解できていない状況があったため、合同研究会を開き、児童・生徒の様子や育みたい力を協議し、教育目標の共有と具体化を図った。児童・生徒の現状を踏まえた課題に対する取組として、「対話的」「問いをもつ」「表現力」などのキーワードが浮かび上がってきた。また、「探究的な学び」が最も大切であるとの共通認識も持つことができた。それを作り出すことができれば、私たちの目指す目標に近づくのではないかと再確認する機会となった。

そのための実践として、以下の3つに取り組んだ。

- ①「生活科・総合的な学習の時間」の9年間の全体計画やカリキュラムの作成
- ②小中同一の単元構想図や学びのサイクルの追究

③教職員が9年間の児童・生徒の実態や必要な教育内容を理解するための授業実践と研究協議

①については、これまで2年間、中学校とともに検討を重ね、学ばせたい内容(探究課題)と身に付けさせたい力(資質・能力)を見据えた9年間のカリキュラムの修正を行ってきた。

②については、小学校1年から中学校3年まで同じ単元構想シートの型を用い、一年間の学習を可視化し、それを共有した。それにより「知りたい」「やってみたい。」という児童・生徒の願いや思いから始まる探究的な学びを追究しやすくなった。また、昨年度の実践を足跡カリキュラムとして追記して振り返ることにより、今年度に生かすことができた。

③については、小中合同で授業研究を行うことで、小学校の総合的な学習の時間の授業の様子を中学校の教職員が把握したり、小学校の教職員が中学生の発達段階を目の当たりにしたりする良い機会ともなった。実践事例をいくつか紹介したい。

第2学年 単元名「また育てたいな、おいしいやさい」

本単元では、児童が主体的に問いや願いを見つけ、その解決や実現に向けて人と関わり合いながら学びを深めていく過程を大切にした。探究的な学びへと系統立てるために、子どもたちに「どうしたい？」と常に

問いかけ、自らの思いや考えを見つめる機会を保障するとともに、野菜を育てる中で生産者の方との関わりを促し、そこから新たな問いを導き出すような場面を設けた。また、「感じる・考える」ことを大切にするために、教員側が手を掛けすぎないようにしたり、栽培プロセスで起こる様々な現象を逃さず取り上げ、自然との関わりについて児童が考えるきっかけを意図的に提示したりすることを意識した。

観察カードの中には、「うまくいかなかったよ」のカードもあり、失敗の中から成功するきっかけを見つけることも学びの中で大切にした。

第4学年 単元名 「福祉～ともに生きるために～」

学習のゴールを「他者理解や自分の考えを深める」に設定した。今年度はパラリンピックが開催されるなど福祉に触れる機会が多いこともあり、まずは「障がいとは何か？」ということで調べ学習をした。そこから出てきた課題を解決するために、地域の障がいのある方との出会いの場を設け、「障がい者福祉」について、さらに考えた。子どもたちは、「様々な人が生きがいをもって生きていること」「障がいがあっても、自分たちと同じように生活している」ことに気づき、「心のバリアフリー」の大切さを知った。そして、これまでに学んできたことをどのように伝えるかについて考え、これからの人との関わり方についてそれぞれが発表を行った。

第6学年 単元名

「日本の伝統文化を繋いでいる人達の想い」
学習のゴールを「日本の伝統文化には歴史や文化がたくさん詰まっていることや、

様々な魅力・価値があることを知り、自分たちも伝統文化を繋いでいくことを大切にする」に設定した。単元の導入では、地域の方を招き、「折り紙」について学ぶ中で、日本の伝統文化に興味を持ち始めた。そして、日本の伝統文化には、他にはどんなものがあるのかを調べたり体験したりする中で、「和菓子」を中心に学習を進めることにした。自分たちで和菓子について調べるだけでなく、地域で和菓子を作っている方や和菓子職人の方と出会わせることで、児童が自分自身の疑問や興味をもとに探究課題を見出すことができるような手立てを取った。

また、ICTを活用し、情報を収集したり、整理したりすることで、自分の考えを持つことができた。また、自分の考えを友達と伝え合ったり、話し合ったりする中で、課題に対する理解が深まったり、解決に向けて答えを見出したりするなど、課題解決に活かすことができた。

指導助言者に、小田部英仁先生をお迎えし、「探究課題の発見と解決を通して」「子どもの学びをつくる生活科・総合的な学習の時間について」という題で講演会を開き、教員全体で理解を深めた。研究を進める中で、教員の「授業づくり」に対する意識が大きく変わり、単元構成の原理に対する理解も深まったと評価された。今後は、探究活動、カリキュラムデザイン、学習評価のさらなる充実を目指し、子どもたちの学びをもっと深めていくための取り組みを進めていくことが課題である。

3 実践の成果と課題



アンケート結果から、教員側で最も多く聞かれた成果は、「教員の意識の変容」であった。「現在の取り組みが、探究的な学習に

結びついているか確認しながら進めていくことが重要」「教員が単元をデザインできることが大切」といった声が寄せられ、授業観がアップデートされたことが伺えた。この意識の変化は、児童の学びにも明確な影響を与えている。「自分から予想したり考えたりする姿が見られるようになった。」「自分たちで話し合って意思決定したり、解決したりする文化が根付き、学校生活の様々な場面で生かされている。」という児童の変容を生み出している。

4 今後の展開

来年度からの小中一貫教育の実施に伴い、中学校と共通の研究テーマに取り組む予定である。この2年間の小中合同研究で築きあげた学びをさらに発展させ、教育の質の向上を図ることが必要である。

課題設定や児童・生徒が自分事として取り組むための手立てなど、授業の進め方に課題を感じている教員も多くみられるので、今後も授業実践交流や観（児童・生徒観、授業観、指導観、評価観）の共有を重ね、実践を磨き、目指す学びを実現したい。